

---

# 緑は異なるもの

ウル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緑は異なもの

### 【Nコード】

N3507T

### 【作者名】

ウル

### 【あらすじ】

夢と現のあわいにて、わたしたちはおまえを待つ　　今宵  
これより書を紐解いて、物語りますは人と緑と異形の幻想譚。あなたのお気に召すおはなしが、どうかここにありますよう。短編連作ファンタジーになります。重複投稿。

## 夜行の蜂（前書き）

『夜行の蜂』

闇深き山を、白き異形の葬列が往く。

ふもとの村から離れ、山の奥で暮らす腕利きの獵師、ヤト。彼には長年追いつづけている獲物がいた。ある満月の晩、彼はついに念願の獲物のもとにたどり着く。

そこで彼が見たものは

第一幕、山と人の和風幻想譚。

## 夜行の蜂

真夜中の山で何処からか蜂の羽音が聞こえてきたら、音のする方向に耳を澄ませというのは、ヤトに狩りを教えた男の最後の言葉だ。もしもそれがこちらに近づいてきているようだったら、地に臥せて耳を塞ぎ、ゆっくりと千数えるのだと。そう最後に言い残して山に入ったきり、男は二度と戻らなかった。

山の獣どもがヤトに返して寄越したのは、左の中指と奥歯の欠片が一握り。あとは、黒く血が染みついた猟銃だけだった。男が山の中で自らの額を撃って死んだのだとヤトが知ったのは、彼が十になつたばかりのときだった。

そして今、ヤトは男がどうして死んだのかを知っている。男が、何に魅せられてしまったのかを。

なぜなら同じモノを、ヤトも追いかけているからだ。

\*\*\*\*\*

「また山に入るの」

出かけようとするヤトの後ろから、不安げな声がかかった。

「なんだイザヤ。まだ起きてたのか」

「寝ないよ、ヤトが帰ってくるまで」

「己れは朝まで帰らないぞ」

「じゃあそれまで待つてる」

強情なイザヤに、ヤトは厳しい顔を作って振り返る。

「こんな山の中で、真夜中に子どもが一人で起きてるもんじゃない」  
イザヤはふもとの村の娘だ。なんの因果からか夏の間だけ預かることになったのだが、夏を過ぎても秋を過ぎても未だに迎えが来る様子はなく、つまりは体のいい厄介払い。イザヤは少し足が不自由だ。これといった身寄りもなく、村からも離れて暮らすヤトは、押

しつけ先としてはちょうどよかったに違いない。

あるいは贅にえのつもりであっただろうか。たまにそんな考えが頭をもたげることもあったが、ヤトは努めて考えないようにした。自らのことを自らでできるのであれば、娘ひとり養うことなどヤトにとつては造作もない。ここは山で、彼はとりわけ優れた狩人であるのだから。

「わたしはもう、子どもじゃない。……だからっ」

「いいから眠れ。行くぞホクト」

名を呼ぶと、土間の隅でじっと待っていたホクトがむくりと起き上がって駆け出した。戸口に立った途端、尾を下げて耳を立てる仕草を見れば、ホクトも気づいているのだろう。

今夜は間違いなく、現れる。

「ねえ、ヤト」

「火、消すなよ」

後ろ手に戸を閉めて無理やり会話を終え、ヤトは麻袋と猟銃を担ぎなおした。空には人を喰いそうに巨大な月が出ているが、おかげで明かりを取りに戻る必要はなさそうだった。

\*\*\*\*\*

夜の山を歩くとき、ヤトはいつも胎内という言葉を思い出す。重なり合う木々の葉が天蓋を張り、高く生えた藪やぶが視界を遮る。静寂の向こうに獯猛で生臭い何かを押し隠しているその闇は、月が照れば照るほどかえって深まってゆくように思えた。けれどこの静けさの中には、多くの獣たちの　そしてそれ以外の息遣いすらも紛れていることを、ヤトたち狩人は知っている。

家を出てから二刻が過ぎた。痛みを感じるほどの無音が永遠に続くかと思われた頃、唐突にホクトが立ち止まった。ウォン、と小さく吠える。瞬間、辺りの気配が張りつめた。

「きたか」

ヤトは麻袋をまさぐると木の仮面を取り出した。白い肌と紅い紋様。頭の後ろで手早く紐を結ぶと、付けられた獣の毛が髪と混ざり、彼を人間離れした姿に変じさせる。仮面は一度生きもののように脈打つと、彼の耳までをも覆い尽くし、すべての音を遮断した。捕食動物の動きだった。

彼の師は、これを怠ったために発狂して死んだのだ。かつてはわからなかったあの出来事の真相も、ヤト自身が彼と同じモノを追うようになってやっと理解することができた。

蜂の羽音を 聞いてしまったのだ。あの夜の音楽を。それゆえに死んだ。

ホクトと出会わなければ、この場に至ることすらなかったのだと思うと、どこか不思議な心地だった。足音を殺し、ヤトはホクトの待つ方へと向かう。

「しずかに」

\*\*\*\*\*

「待つんだホクト 待て」

ヤトはホクトに声をかけつつ、時を見計らう。

『夜行』の現れるのは月に一度きりの満月の晩。それも曇天ではならず、一晚中雲に隠されることなく月が照っていなければならぬ。この機を逃すことはできなかった。もし狩り損ねてしまえば山は冬に入り、そうなれば来年まで待たなければならぬ。流石のヤトにも単独での冬の山入りは危険が大きすぎるからだ。

風はゆるゆると梢を揺らし、月は浩々（こうこう）と深緑へ滴り落ちる。森は声に満たないささやきに包まれていつまでも夜と戯れていそう。そんな闇より深い緑の中を、滑るように進んでゆくのは白い影法師の群れ。『夜行』。山の葬列。太古から連綿と続いてきた異形の営み。

そうして眠りにも似た長い沈黙の後で、それはやってきた。

「『輿』だ」

夜が刹那、身震いをした。

木々の合間から覗く、圧倒的な違和。二列の白装束に担ぎ上げられるようにして現れたのは、『夜行』たちのゆうに二倍はあろうかという大きさのモノ。白い『夜行』が運んでいるのは、純白の球体だった。

『輿』の腹には、山のすべてが満たされている。

古くから『夜行』について語られてきた言い伝えは、ヤトの師を含む数多くの狩人たちを夜の山に誘い、殺してきた。多くは彼と同じく山中で死体となって見つかったが、かろうじて村へ帰りついた者も魂を奪われたように廃人同然となり、間もなく自死した。これはふもとの村人なら誰しもが乳飲み子の頃から語り聴かされてきた寝物語であり、それゆえ彼らの心に絶大な恐怖心を植えつけてきている。

ヤトが村から離れて暮らしているのは様々な理由からであったが、根本的なものを挙げれば彼が『夜行』を追う者であること、ただその一点に尽きた。村人たちは彼が腕利きの猟師であることは知っているし、その天涯孤独てんがいこどくの身の上に同情する向きもある。彼が『夜行』を追うかたがた捕らえてくる獲物が、村の貴重な財源となっていることも彼らは理解していた。だがその上ですら、山あいの小さな村の住人たちにとって『夜行』を追うことが禁忌であり、それを冒す者が異端であることに揺るぎはなかったのだ。

数え上げることもできぬ長きに渡り蓄積された因習は、往々にして理性の声を凌駕りょうがする。『夜行』。それはこの世ならぬもの。人の身で触れてはならぬもの。

藪の中で機をうかがうヤトの前で、『輿』は一瞬、輪郭をゆがめた。巨大な球体というたいそう無機物じみた姿をしていながら、それはまるで獣が腹を波打たせるように身を震わせるのだ。背筋の粟あ立つ光景わただった。視線を獲物から外さないまま、ヤトは猟銃を背中から下ろし、いつでも撃てるように用意した。こんなモノに猟銃が

通用するのかという疑念が脳裏をかすめたが、むろん無視をする。

そして『輿』は唄を歌いはじめた。

夜の音楽。人の心を狂わせ、命を奪う異形の唄が山を渡ってゆく。冷たくぬめった何かが身体を這い回るような感覚を覚えてヤトは総毛立った。耳は塞いでいるといえど、蜂の羽音に似た低い唸りは全身の毛穴という毛穴から彼の精神へと干渉の手を伸ばしてくる。月の光も心なしかその濃厚さを深めたように思えた。出ていくなら今しかない。沈めていた腰を浮かせ、ヤトが走り出そうとした瞬間だった。

ぐい、と服の裾を引くものがあつた。ホクトだ。

やめろ！

押し殺した声で叱りつけ、力任せに牙を振り払おうとしたヤトは、周囲の異変に気づいた。蜂の羽音が、止んでいる？ 本能的な危機感に駆られたヤトはすぐさま『夜行』たちの列へ目を向け、そこに信じがたいものを見る。

「イザヤ　っ！」

足の悪い少女が、ふらふらと、『夜行』たちの方へと引き寄せられてゆく。にわかには理解しがたい光景だった。だが、どうして、という怒りも、どうやってという疑問も、こつなってしまうてはもはや意味を成さない。

行かなければ、死ぬ。

ヤトは本能の命じるまま走り出していた。その横をホクトが弾丸のように追い越してゆく。『夜行』たちとの距離はかなりあつた。ヤトが走る間に、歓喜するようにその白い膚を波打たせた『輿』は再び、今までとは比較にならないほど強く、強く、唄を歌いはじめた。

ヤトがどれほど声を張り上げ叫んでも、イザヤは彼にはまったく気づいていないようだった。両の手を伸ばし、唄に吸い寄せられるようにして『輿』へと近づいてゆくその様は、赤子が母親の乳を求める姿にも見える。

「くそっ」

歯ぎしりをして、ヤトは走りながら銃を構えた。

直後、手元に衝撃が響いたが、『輿』は揺らがない。むろん本来猟銃は走りながら撃つようにはできていない。狙いが逸れるのは当然だった。先行していたホクトも、『輿』を守るかのように押し寄せる『夜行』たちに遮られて、それ以上進むことができないでいた。果敢に白い装束の群れに飛び込むものの、いかんせん数が多すぎる。その間にも、イザヤは『輿』へと一歩一歩近づいてゆく。獲物の接近を認めた羽音はますます昂<sup>たか</sup>ぶりを増し、『輿』の白い腹は蛇のようにうねりのたうつ。凄まじい大音声に、陽炎のごとく景色がゆがみはじめた。

「すまない」

ヤトは足を止めた。仮面をつけ、何も聴こえないはずの耳の内では絶望が荒れ狂う。もう、間に合わない。気づくのが遅すぎたのだ。イザヤがどうやってここに辿り着いたかは今をもってもわからなかったが、たとえ気づいたと同時に『輿』を撃つて、それで仕留<sup>しと</sup>められたとしても、唄自体をなかったことにはできないのだ。間に合いはしなかつたろう。

ホクトだけがまだ諦めることなく、『夜行』たちに飛びかかっていたが、けれどそれすらも遅いのは明らかだった。たとえ今すぐ助け出すことができたとしても、イザヤが正気を取り戻せる可能性は皆無に等しいのだから。ヤトの師は山に流れる唄を耳にただけで、狂気に吞まれて死んだという。いわんや、あれほどの至近で、あれほどの大きさで耳にしたイザヤのことは、考えるまでもなかった。ヤトは見てきた。気の触れて、水の代わりに泥を嚼<sup>す</sup>り、肉の代わりに藁屑<sup>わらくず</sup>を食<sup>は</sup>むようになった者たちを。疎まれ蔑まれながら情性のよう<sup>しやほね</sup>に生きて、腐り落ちるよう<sup>しやほね</sup>にして死にゆくしかなかった屍<sup>しかばね</sup>たちを。ならば。

「すまない」

そして、少女は死んだ。ヤトが殺したのだ。

ヤトはその無愛想な少女がやって来たときのことを、いつも鮮明に思い出せる。なぜかと問われたなら、似ていたからだと答えるだろう。イザヤという名の少女が、幼い頃から師とともに野山を馳せ、友は山の獣ばかりだった己の姿に、よく似ていたからであると。

ヤトはここよりさらに北の村の、貧しい百姓の末の子として生まれた。土は痩せ、冬の厳しさは言葉では尽くせぬほど苛烈を極める寒村だった。やがて彼は数え年で四つになる前に家を捨てた。力の強い兄たちから与えられる暴力と、貧しさゆえに向けられる憐れみと侮蔑の目、収まることのない飢えと、固い土に鋤を入れるため腫れては潰れる肉刺の痛みから逃げ出した先。一晩の寒さをしのぐため忍び込んだ廃屋にいた男。その目。夜の闇にあつても爛々（らんらん）と輝く、ヤトは男のその目に惹かれた。己れもそれが欲しいと請うた。そのためならばいかなる労苦も厭わぬと、まさしくその労苦からこそ逃れるために家を捨てたはずの少年は、男へ懇願したのだった。

ヤトを拾った男は厳しく、賢く、冷酷で、そしてこの上なく優しかった。まるで山のようにであったとヤトは彼を思い返す。二人は来る日も来る日も山に入り、学び、畏れ、感嘆し、喜びそして苦しんだ。ときには足裏が血まみれになるほど歩くことも、飲まず喰わずで数日を過ごすこともあった。鋭い枝が皮膚を切り裂くことは茶飯事であったし、熊や猪といった獣だけではなく、ときに鹿のような狩るべき獲物ですら彼の前に脅威として立ちはだかることもしばしばだった。幼いヤトにとって世界とは己と己の師と、そして山のみを指す言葉であった。

男に付き従ううち、幼いヤトは男が定期的にある場所のある山へ立ち寄ることに気づいていた。そしてそこへ赴くと男は決まって、夜、何かに耳を澄ませるような仕草を見せるのだった。むろんその

ときのヤトが知るはずもなかったが、今のヤトがそうであるように、彼もまた『夜行』を『輿』を追い続けていたのだった。

そうして三年が過ぎ、いつしかヤトは男を、師ではなく父と呼ぶようになった。

ヤトは土間に立って自分を見上げる黒髪の少女を見たとき、ある予感を抱いたのだ。この娘は恐らく自分と同じモノになる。なるうとしてしている。人よりもずっと獣に近く、ぬくい夕餉ゆづげの匂いよりも、むせ返る緑の息吹の方にこそ心躍らせるモノに、なるうとしているのだと。そしてきつと自分は、この娘を愛するようになるだろう、と。

皮肉にも予感は、違わなかった。      どちらも。

ヤトは冷えきったイザヤの体を抱きながら思った。胸に開いた穴から血が流れきってしまったからだろうか、それは枯れ木のごとく軽かった。これが先ほどまで息をしていた人間であるなど嘘のようだった。

ヤトの隣には、巨大な白い球体が転がっていた。『輿』である。腹に穿うがたれたいくつもの穴からは、どくどくと、白い乳のようなものが流れ出していた。ついに彼は仕留めたのだ。『輿』を。幾百という狩人たちの命を呑み込み、彼から父を奪っただけに飽き足らず、彼の愛する者をまた一人奪い去った異形を。

父を失ってから、一生をかけて追って来たはずだった。それ以外など、一度とて望んだことはなかった。だというのに、ヤトはようやく仕留めた獲物を前にして、微塵みじんの喜びも覚えることができないでいた。代わりになにやら重みの感じられないごわごわとしたものを胸の中に詰め込まれたかのようにだった。

ふと手の甲に冷たい感触を感じると、ホクトだった。猟犬は慰めでもするかのように、主人の手を舐めていた。呆然とされるがままにするヤトの前で、猟犬は伏せていた目を上げた。黒真珠の両目は静かにヤトへ語りかける。

「ホクト。己れは」

俺のことは構わないさ。

「だけど」

お前は俺の夢を果たしてくれた。『輿』を仕留めるって夢をな。それは、あんたが“戻ってくる”ために」

悔るんじゃないぞ。家族も何もかも捨てて『夜行』を追い続けてた俺に、今更人間であることに未練があるとも思ってるのか。お前が俺の夢を果たしてくれた今、俺は還るだけだ。この山に。それのどこが恐ろしいっていうんだ？

ヤトは沈黙した。

父が死んだとき、山がヤトに返して寄越したのは齒や指や血の染みた猟銃だけではなかった。もうひとつ、彼の元に届けられたものがあった。それは家の戸口で自らを見上げる一頭の獵犬。一瞥いちべつでヤトは理解した。闇の内に灯る火のような、漆黒の両眼。幼きヤトが心から熱望し、ついには手に入れたその両眼を、彼が見紛うはずがなかったのだから。

いかような力や理屈がそこにあったのかはわからない。わからないがしかし、それは彼が師と仰ぎ、いつしか父と呼んだ男の、もの。夜斗に己の名の一部を与えた男の。北斗のものだったのだ。

使え。『輿』の力を。

あらゆる音を遮断する仮面の内にあつて、その声ははっきりと彼の耳に届いた。『輿』の腹からは、どくりどくりと、ほの白い乳が流れていた。

\*\*\*\*\*

ヤとは昼を挟んだ二つの暗い時間。

コウとは交差する十字路であり長い行列。

すなわちヤコウとは、「生と死を行き交うモノ」に他ならない。

命を流れる川としたならば、人の赤子は川の上流に、獣は水の湧

く泉に、死者は海の方こうにその身を置くだろう。  
ならば、『夜行』が運ぶ『輿』は川を流れる水そのものだ。  
永遠の生と一瞬の死。それはいつでも等しい。  
ゆえに、人はそのどちらかだけを選ぶことはできない。

\*\*\*\*\*

「起きたか」

「わたし……何を？」

イザヤが薄い寝床から身を起こすと、ヤトは無言で粥かゆをついだ椀を差し出した。「喰え」

しばらく惚けたような顔で木の椀を眺めていたイザヤだったが、やがて受け取り、一口、また一口と食べはじめた。「おいしい」その両目から堰せきを切ったように涙が流れ出す。「おいしい」

「馬鹿が。なんで泣くんのだ」

「……夢、見てたの。苦しくて、冷たくて、寂しくて……。わたし……死んじゃったみたいだった……。それで、ヤトが……泣いててわたしのほうを見て、泣いてて……。それで、わたし……」

「夢なんか気にするな。見ればわかるだろう、己れもお前もちゃんと生きてる。だから黙って喰え」

ヤトは泣きじゃくるイザヤから目を逸らすと立ち上がり、部屋の隅へ行った。ややあつて戻ってきた彼の手には何かが握られていた。「なに……？」

イザヤが顔を上げると、ヤトは険しい顔を作る。それはイザヤに對してなんらかの感情を向けているというより、強い痛みに耐えているところであるといったほうが正しく見えて、余計に彼女を困惑させる。

「いいからお前は、黙って飯を喰うことだけを考えろ」

強引な指示に戸惑いながらも、言われた通り匙さじを口に運びはじめイザヤ。その背へと回ったヤトは膝をついて、イザヤの首に何か

を回した。しゃらりと貝殻のぶつかりあうような音がする。

「これって……」

「黙って喰え」

彼女の首にかけられたのは、獣の骨で作られた首飾りだった。細い紐が通されたのは削り出されたいくつかの骨と、そして一本の牙だ。ヤトはイザヤの首に合わせて紐を調節しながら口を開く。

「お前、言ったな。わたしはもう子どもじゃないんだって」

だしぬけの問いに、イザヤは恐る恐る頷く。

「だったらもう、ここで暮らさなくて大丈夫だな」

ひ、と小さな嗚咽が漏れた。涙はもはや止まり、これからヤトが口にするだろう言葉に彼女の顔はわずかに青ざめて見えた。

別れ。追い出されるのだ。初めてこの男と出会ってから、いつ言われるかいつ言われるかと恐れ続いていた言葉。季節が過ぎて、己の心に気づいてからはさらに恐ろしくなった瞬間が、ついに今訪れようとしているのだ。

ヤトはそれ以上は何も言わずに紐を結び終えた。

「よし、これでいい。大事にするんだぞ」

そう言つとヤトは立ち上がって、土間へと向かう。

「わたし」

腰を下ろして草履わらじを履くヤトの背に、イザヤは弱々しい声をかける。普段の勝気な性格からは想像できないほどの小さなその声は、誰かを引きとめる力など持っていないと思われた。

「じゃあ己れは村に行つてくるから」

「ヤト、わたしっ」

思わず立ち上がったイザヤの顔に、驚愕が浮かぶ。「足が……」

「だいぶ血が流れたんだ。もう少し休め」

「どづいうこと……それに、これって……ホクトの……」

首飾りを手にとり見つめるイザヤ。どこにもない凜々しい獵犬の姿と首飾り、おぼろげな記憶、思い通りに動く足。そしてヤトの言葉とが、彼女の中で急速に繋がってゆく。驚きにつるたえた表情は

不安と恐怖とをそこに混ぜて、ふたたび泣き出してしまいそうに崩れてゆく。

「何も心配するな。ホクトは山に還っただけだ。どんな生きものも遅かれ早かれそうなる運命なんだ」

「だけど……わたし……っ！ ねえっ！」

イザヤが叫んでも、ヤトはあくまで振り返ろうとしない。草履を履き終えたのか立ち上がると、荷物を入れた麻袋と猟銃とを担ぎ上げた。土間とは高さがあるのに、ヤトの背はイザヤとそう変わらない。遅<sup>たくま</sup>しく広い背中。厳しく、賢く、冷酷で、そしてこの上なく優しい。いとしい背中。

その背中に言葉なく拒まれて、イザヤの頬をふたたび涙が伝い落ちはじめた。雛鳥のような頼りない足どりで、それでも彼女はヤトのそばに近づいてゆく。

「ねえ」

何も言わない猟師服の裾に、小刻みに震える手が伸びる。ぎこちない足での野良仕事で皮は硬くなり、冷たい川の水はいくつものあかぎれを作って寄越した。決してすべらかとは言えない小さな手だ。それでも傍らには、不器用な様を見かねて横から鋏<sup>すき</sup>を取り上げてくれる手が、ぶつきらばつに膏<sup>こう</sup>をすり込んでくれる大きな手が、あったのだ。

だから。わたしは。

「お願い。行かないで」

イザヤが零す、小さなささやきにも満たない懇願。それは次第に大きさを増し、やがて嗚咽へと変わった。ヤトの服の裾を握りしめたまま、彼女の体は力なく崩れ落ち なかった。

はじめイザヤには、何が起こっているのかわからなかった。ただ、とても暖かかった。自分の中でずっと凍てついていた何かが、ゆつくりと融けてゆく。絡みあってどうしようもなくなった糸が解かれてゆくように、温もりが胸に染み入ってくる。

首筋に温かい息が切れ切れにかかり、イザヤはヤトの胸の中で顔

を上げた。

彼女を抱きしめた男は 笑っていた。初めて見る笑顔で「ごめんな」と頭を撫でられたら、尋ねたかった問いだつて、得意な憎まれ口だつて、引っ込んでしまう。ずるい。イザヤは心の中で唇を尖らせた。

「『夜行』を追うのは、もう終わりだ。己れは村に行つてみんなに頭を下げてくる。それで、もし許されたら、そしてお前が頷いてくれるなら、二人で暮らそう」

「それ……つて」

「そうだな」

しばし言葉を探しあぐねるように黙り込んでから、ヤトはイザヤを抱いていた腕をほどく。くしゃくしゃになつた頬を流れた幾筋もの涙の跡を、節くれだつた温かい指がそつと拭う。

「己れの嫁になつてくれ」

「ばか」

そのときイザヤが見た男の目はもう、獣のものではなかった。

\*\*\*\*\*

「火、消すなよ」

「わかつてるよ、うるさいな。他に言うことねえのかよ」

「行つてくる」

「……ああ。待ってる」

そんな言葉を交わしてから歩き出した。

空を仰ぐ。雲ひとつない蒼穹そうきゆうの向こうで山並みは鮮やかで、まるでこの世界に変わりゆくものなどありやしないのだと、嘯なげくかのようだった。

けれど歩いてゆくヤトの頬には、ふと、冷たい風が吹きつけるのだ。

「冬がくる」

そしてやがて春がくる。夏がきて、秋になる。世界は今も変わる  
ことなく変わり続けている。それだけはおそらく、この先いずれの  
ときも、永劫えいこくに変わることがないのだろう。

何処からか、蜂の羽音が聴こえたような気がした。

夜行の蜂 了

## 夜行の蜂（後書き）

「緑は異なもの」第一幕、『夜行の蜂』でした。

このシリーズ自体そうですが、本作は特にタイトルありき、タイトルからお話を広げて考えた作品です。夜行ってなんだろう、と考えながら漢和辞典ペラペラして書きました。

別にハイキングが好きとかいうわけではないんですが、私は昔から「山」とか「樹」とか「森」などの、「緑」に対して妙に惹かれます。

そんな思いを詰め込んだのがこのシリーズ「緑は異なもの」です。どこまで続くかわかりませんが、よろしく願いします。

次幕は、「エバーグリーン」。

今回に乗じて癖の強いお話となっております。

みなさんが拙作を読んで何かを感じてくださったなら、それが私の至上の幸福です。ありがとうございます。

## エバーグリーン（前書き）

『エバーグリーン』

苔むした参道の向こうにかみさまはいた。

わたしはある夏の日、ウタさんとともに森の奥へとおもむいた。  
そこで目にしたのは、雲の影と跳ねる鯉と緑の目と、かみさま。

わたしは、だれだったの？

第二幕、隠喩と覚醒の現代幻想譚。

## エバーグリーン

二本の電車と二本のバスを乗り継げばもうそこは見知らぬ国だ。

バスのステップを降りる。ほほにふれた風には知らない香りがまじっていて、ここはもうわたしのテリトリーではないのだな、なんてちょっと思った。寂しさはなく、静かな高揚感と幽かすかな不安だけがわたしのなかでくるくると渦巻いている。

わたしの住む街は都会だった。あの人ごみは、わたしから色んなものを吸いあげる。たとえば酸素とか。けだるく、いつもどこかが醒めていて、どこかが眠っている街。美しい街ではないし、優しい街でもないけれど、やっぱりわたしはあそこが好きだと思う。

ここではきつと、わたしはわたしでいられない。

ベンチに腰かけ、水筒の麦茶をとりだすと目を細めた。視界ががすかににじみ、ひかりに満ちた景色はほんのわずか明度を落とす。これでいい。こんな風にあわい輪郭の世界がいい。

銀の筒に跳ねかえる初夏の日ざしは、わたしにはちょっとまぶしすぎた。

古びたバスの待合所で、色あせた海のポスターを眺めていると、遠い木々のざわめきも潮騒しほざいのように聴こえてくる。待合所の古びた木の匂いと、耳に届く波の音はちぐはぐで、わたしは小さくくしゃみをした。

「カゼかい？」

ほっそりとした脚が二本、わたしの前に並んでいた。視線をずらすと真っ白なシャツが光る。鼻をついたら洗いたての洗濯物の匂いがしそう。

「ウタさん、来たんだ」

「来たよ」ウタさんはうなずくと、「きみの前に私がいるってこと

は、私がきみに会いに来たってことだもの」などと哲学的なことをうそぶく。

ウタさんはいつもこうだ。人を煙に巻くのがとても上手い。実のところわたしは哲学を学んだ経験がないので、彼女の台詞が哲学的かどうかは自信がないが、とにかく、ウタさんはヘンな人だ。

「あの人はいいの？ 待つてるみたいだけど」

ウタさんの肩ごしに指をさす。道路には、真っ黒な車が止まっている。よく磨かれていて、近づいたら顔が映りそうだ。

「ああ、忘れてた」

ウタさんはふり向くと、軽く手を挙げた。

黒い車は音もなくすうつと走りだすと、すぐに見えなくなった。最初から存在しなかったみたい。もしかしてあれは雲の影か何かではなかったのだろうかと空を見上げてみるが、そこには雲ひとつない快晴がのっぺりと広がっているだけだった。

「行くかい、ミツ」

わたしはうなずき、腰をあげた。慣れないスカートにシワがついていないか確認する。大丈夫みたいだ。水筒を鞆に戻すかどうかちよつと迷い、結局肩紐を取りだして首にかけた。

「何それ、カワイイ。遠足？」

「ウタさん。ここからだどれくらい？」

「きみってさりげなく人の話聞かないよね」

ウタさんは苦笑いで、「入り口まではすぐ」と答えた。「そつから森の中が長いけど、今からだったらたぶん二時間には着くわよ」

「なら良かった」

「バスだったら気にしなくていいわよ。私が送るから」  
ウタさんはそう言ったが、わたしが気にしていたのはバスの時刻ではなかった。首を横にふった。ウタさんの「彼氏」の車に乗るなんて御免こうむりたい。

「どうして来たんですか」

この森の木はとても背が高い。だから、すべては上からやってくる。

蝉の声や葉の合間をこぼれ落ちてくる太陽の光はもちろん、わたしが発した言葉もまた一旦地面に吸い込まれ、根を通り、幹をよじ登り、再び梢から降ってくる。

一度木のなかをくぐった言葉は、まるきりちがう発音に聞こえた。これではまるでわたしが、ウタさんを憎んでいるみたいだ。

「だって呼ばれたもの」間を置いてウタさんは言う。

「行きたくないって言ったのに」

ウタさんは私の半歩前を歩いている。さきほどから追いつこうとして足を速めているのに、どうしても隣に並ぶことができない。ウタさん、わざとやっているな。

「それは私ひとりなら。ミツがいるなら大丈夫よ」

だいじょうぶよ、と降ってきたウタさんの声はひんやりとしている。

わたしはふと、ウタさんの顔が見えないことが不安になった。今こちらをふり返ったなら、それはもう既にヒトのものじゃないかもしれないと、子供じみた妄想が脳裏をかすめる。

馬鹿らしい、と思ったのに、わたしの両目はすうつとウタさんの足元に吸い寄せられた。苔むした石段にじとりと伸びた影。ウタさんのそれは、やけにくつきりとして濃い。墨をまいたように。

今日は太陽の光が強いからだろうか。それとも、ウタさんがすべての光を呑みこんでしまったから、なのだろうか。

「わたしがいるから」

「うん。きみがいるから」

こちらを見ずに答えた平坦な台詞は、愛の告白にも、憎しみの呪詛にも聴こえた。あるいはどちらでもないのかも。

ウタさんがどんな顔をしてたか、わたしはもう思い出せないでい

る。

ふう、とウタさんは息をつく。

東屋あづまやに置かれたベンチに、わたしたちは座っていた。石段は目の前で踊り場を作り、左手に折れてまた上へと伸びている。こんな場所があるということはここにも定期的に人が訪れるんだろうか。

それにしても、妙に空気が静かすぎる気もするけれど。

「思ったよりもかかるのかな」

「かもしれないわね」

うつむいたままの、気のない返事が返ってくる。何かを待っているような、意識がこちらに向いていないような。

「いま何時ですか」

ウタさんは意外そうにわたしを見る。

「時計、もってないの」

「はい」

「ケータイは？」

わたしは首を横に振った。

ちよつぱり困ったようにまばたきをして、どことなく残念そうにああ、そうなの、と言う。しばらくわたしを見つめてから、ウタさんはスリムジーンズから携帯電話を取り出した。そういえばウタさんが鞆を持ってるって、見たことない。

「ま、時代に逆行してるミツも嫌いじゃないけど」

一時四十分、と答える。

「じゃあ二時には間に合わないかな」

「いや」

じつと携帯の画面を見つめたまま「だいじょうぶ」と言うウタさんの横顔に幽かな微笑。わたしにはそれがやはりヒトのものに見えない。ヒトのものではないからといって、じゃあ何かと考えれば、よくわからない。

ウタさんがときどき見せるこういふ表情を、わたしはあまり好き

ではない。これは何もかも知っていて、それでいてそれを誰にも隠している、そういう微笑だから。

「でも、あと二十分しかないのに」

ウタさんはディスプレイから目を離さない。「だいじょうぶ」&quot;とだけ言う。だいじょうぶ。だいじょうぶ。とくり返す。

ヘンだな、と思ったたら、辺りがいつの間にか暗くなっていたせいらしい。影がこちらに向かって地面を滑ってきたような、嫌な暗さだ。空はあんなに真つ青なのに。

「そうか」

風がぴたりとやんだ。

眉間に指を突きつけられたときみたいに、ヘンな気配が耳の奥でぞわっとふくらんで、わたしは上手く呼吸ができなくなる。

「もう着いてたんだ」

ケータイをぱたりと閉じ、こちらをふり返らず、ウタさんはそつとうなずく。その横顔には、深い影が、濡れたように落ちている。

水音が響いている。これは、魚が跳ねる音だ。

喩えではなく、わたしの前では、魚が水面から踊り出して、ぽちよんぽちよんと波を立てていた。あざやかな錦鯉ニホキリの群れ。どこからか湧いた流れに逆らい、鯉たちは逆行ネウリウしていく。体をよじって水面を割り、いくつもの波紋を残しながら、再び跳びあがる。石段の上へ、上へと。

緑色に苔むした石の階段は、わたしの『正面』にあった。

「ええと」

これはなんですか。何が起きているんです。鯉ニホって逆行しましたっけ。この石段はどこから。この水はどこから。突然目の前ではじまったことに、うまく言葉がつかない。どれも疑問詞ばかり。

「ミツ、行こう」

「どくに」

「この上よ」

手を引かれるままに、ひざまで浸す水のなかに立つ。鯉たちのしぶきで小さな虹ができている。手を伸ばすと、すこし濡れた。

ウタさんが見ているのもまた、鯉たちと同じ石段の先だった。

ばしゃんばしゃんと音を立てて、わたしとウタさんは段を登る。

小さな滝のように水が流れてくる。足元で、すぐ隣で、一步先で誘うように鯉たちが跳ねている。白と赤と黒のまだら。流れる血と乾いた血のまだら。しぶきがつめたくて気持ちいい。

「きみが来た。その時に全部わかった」

石段を登るあいだ、わたしはウタさんに色々たずねたが、答えとして返ってきたのは見当はずれなもの。

流石にむっとして「来たって、わたしが誘ったのに」と強く言う。

「馬鹿ね。ちがうのよ。きみが私をここに誘ったんじゃない、私  
がきみが私をここに誘うように誘ったの」

ウタさんは隣でくすくす笑う。

「だいいち、きみにこの話をしたのは私じゃない」

さつきウタさんの横顔に感じたものは正しかったみたいだ。

「わたしに何をさせたいんですか」

「べつに。見てほしいだけよ。私がずっと、ずうっと逃げ続けていたものを、いっしょにね」

ぞくりとした。わたしはわからなくなった。このひとは何者なのだろう。なぜこんなにも赤い、とても赤い唇をしているのか。

そうだ、わたしはこのひとのことを知らない。歳も名前も性別も、どうしてわたしのことをミツと呼ぶのかさえ、わからない。どうしてわたしがこのひとを、ウタさんと呼ぶのかだって、わからない。

あれ。

わたしはほんとうに、前からこの人を知っていたの？

視界がひらけた。静寂が音をたてて広がった。神の前に立ったような沈黙。鯉たちが跳ねる水音、鳥の羽音、風鳴り、木々の葉ずれ、虫の足音、足元の苔がのびる音、わたしのミトコンドリアが呼吸する音すらも、止んだ。世界が息をひそめていた。

わたしの前には長い長い石畳が続いている。参道、という言葉を思い出した。

「紹介するわ。これが私の『かみさま』よ」  
緑色をしている。

わたしははじめ、それが緑色であることしかわからなかった。それほどまでに深く、濃い、夜の闇にも似た緑だった。

石畳の道の果てに、遠近感を狂わすような、巨大な樹があった。幹の直径だけでわたしの視界を半分埋める埒外うちがいの大きさに加え、梢の位置ははるかに高く、かなり離れたここから首をひねっても、視界には入らない。生臭い緑の匂いを感じて、わたしは今すぐここを逃げ出したい気分になった。

あれはまるで森だ。苔や蔦つたにおおわれた、ちいさな森が道の向こうにそびえている。

「かみさま……」

ウタさんの言葉は間違っていない。この世界に神が存在するなら、こういう姿をしているに違いない。理性や理屈を超えてわたしは理解する。

これがかみさまなのだ。これがウタさんのかみさま。

もしかしたら、わたしのかみさま。

「ミツ、おいで」

ウタさんは樹のすぐそばで手招きしていた。いつの間にあそこまで行ったんだらうか。わたしは誘われるがままに歩き出した。

参道を半分ほど歩いたところで、違和感を感じて立ち止まる。足元を見ると、びっしりと苔が生えた石畳が目に入った。ふかふかとしてなんだか緑色の絨毯みたいだな、と思ったときだ。

やわらかく湿った苔の感触なんて、なんで。

いつからだったのか。わたしは靴をはいていなかった。足の裏から頭のとっぺんまで、波のように悪寒が走った。わたしはこの緑に触れているのだ。あいだに何もはさむことなく、直接に触れている。

もしくは、触れられているのだ。

走り出した。

苔に足をとられ、何度も転びそうになる。そのたびに悲鳴を上げて、また走る。

ひきずりこまれる。ひきずりこまれる？

自分の考えていることが自分でもうまくわからない。とにかく怖くて怖くてたまらない。あの深い緑のなかにひきずりこまれるその前に、早くウタさんのところへ行かなければならないと、強い衝動だけがわたしを駆り立てていく。

走っても走っても距離が縮まらず、わたしの背中には次第にじつとりとした汗がにじみはじめた。石畳の道がどんどのびて行くような錯覚に襲われる。

足をもつれさせて走りながら、わたしは場違いなことを考える。

鞆も、首にかけた水筒も、どこにいつてしまったんだろう。

わたしがあの街から連れてきたものは、ここにいたって、ぜんぶ消えうせていた。

「どうしたの、そんなに慌てて」

わたしは首を横にふった。息が切れて言葉が出てこない。

そう、と小さくつぶやくと、わたしの息が整うのを待って、ウタさんは自分の前のものに触れた。

「見てごらん」

ウタさんに言われて気がついた。兇暴な緑のなかに一点、絵具を落としたような朱色。この樹はただそこに立っていただけではない。鳥居と、その奥に祀まつられた祠を飲み込み成長していたのだ。

たべてしまったのよ。

「人が作ったかみさまを、この樹はやすやすと呑みこんでしまった。まがい物のかみを、本物のかみさまは許さなかったの」

恍惚とした声で、ウタさんは褪せた朱の鳥居をなせる。

「これをわたしに？」

「そう。見せたかった」

かみさまを、見せたかった。

ウタさんはいつまでも、鳥居をさすり続ける。憑かれたようにずつと。

「ウタさん」

「なあにミツ」

「こつちを向いて」

鳥居に触れていたウタさんの手がぴたりと止まった。

ややあつてから肩が静かにゆれ始めた。笑って、いるんだ。

「ミツ。私、賢い子って好きよ」

不意にウタさんがふり向いた。赤い唇がにと吊りあがって、白く硬そうな歯があふれる。ウタさんは微笑んでいる。それはすくなくとも、あの寒々とした微笑よりはずっと美しいものに見えた、けれど。

こちらを見る二つの目は、深い、緑色をしていた。

「あなたは、だれ」

足がぐらつく。一步、下がった。

ぱちゃんと音がし、ふり返ると、ほほに水が飛んだ。三色のまだら。錦鯉たちが再び群れをなしていた。足元に再び水が満ちはじめる。

「心配要らないわ。あなたは大丈夫。私たちはあなたを傷つけないし、私たちでは傷つけられない。その子たちについて行けば、ちゃんと森を抜けられる」

わたしは混乱していた。自分のなかに突如あらわれた感情が理解できなかった。

恐怖じゃなかった。この足の震えはたぶん、わたしがウタさんや、その背後のものを怖れているからではないんだ。

そうだとしたら、これは、喜び？

ほほにかかった水滴は、もう全然つめたくない。

「この世界はとても多層的なの。きみが今まで立ってたのはその表層。でも、今日きみはひとつ層を降りてきた。私たちのところへ。そして一枚めくればもう一枚、もう一枚、もう一枚、きみはこれから、もっと下まで降りていく。私たちのゆけない場所へ。誰もゆけないところまで。どういうことかわかるでしょう？」

わからない、と言えない自分に驚いた。子供のころに読んだ絵本をもう一回読み聞かされているような、そんな気分だった。うなずくわたしのことは見ずに、ウタさんは愉快そうに言葉をつづける。

「ねえミツ、私たちはあなたを怖れていたのよ。あなたから、ずっと逃げつづけていたの。あなたが目覚めれば、取り返しのつかない変化が起きてしまうから。だから……そう、結局は私たちでさえ、さらに先を見せられることが怖かったのかもしれない。

だけどね、今日、きみが来たときに全部わかったの。いきものが生きるというのはね、新しくなるってことなの。更新されること。刷新されること。だから、私たちは楽しみにしているわ。いつかきみがまたここに帰ってきたとき、あなたがどんなものになっているかを。

たとえそれが私たちにとって、危険な存在であったとしても」

言い終わると、ウタさんはそっとまぶたを閉じた。びっくりするほど長いまつげが、ほほに影を落とす。

もしかしたら相談しているのかもしれない。彼女のかみさまと。

「それじゃあ、行くね」

わたしは言つて、すこしためらつてから付け足した。「また会い  
ましょう、三人で」

うすく緑の目を開け、ウタさんはくすりと笑った。

「またね。楽しかったわよ」

まだぜんぜん数えたりてないけれど、と。

先に行く鯉たちがぼちよんぼちよんと跳ね、水滴が飛ぶ。この鯉  
たちに導かれて、わたしはどこに行くのだろう。わたしは何になる  
のだろう。

でも今はひとまずあの街に帰り、酸素を奪われながらあの家に帰  
り、やわらかい布団のなかにもぐりこんで、いつものように眠りに  
つこう。

そして目がさめたら、いろいろなことを考えるのだ。

今までのこと、これからのこと、ウタさんのこと、この世界のこ  
と、この世界ではないこの世界のこと。

そして何よりも、わたしが誰だったのかについて。

エバーグリーン 了

## エバーグリーン（後書き）

「緑は異なるもの」第二幕、『エバーグリーン』でした。

今作は、2009年開催の『覆面作家企画4』に提出した作品を加筆したものです。お題は『道』でした。時期的には第一幕の『夜の蜂』よりも先に完成していた作品です。

お読みくださったみなさまはおそらく多くの疑問を抱かれたことかと思いますが、しかし、それがまた私の狙いでもあります。説明は無粋でしょうからやめましょう。

次幕は、「銀の王」。

お伽話と現実が入り乱れる、一風変わったお話になる予定です。

シリーズのマイルストーンゆえ、色々な含みのある本作ですが、みなさんにわずかでも何かが伝わっていればと思います。ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3507t/>

---

緑は異なるもの

2011年5月21日03時56分発行